せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第164号・平成15年5月1日

年表で読む古平の歴史

《70》

小学校教育　2

■新地小学校創立

明治20年10月6日、浜中小学校が原因不明の出火から全焼し、翌月から港町の収税倉庫を仮校舎として授業を開始した。

このようなこともあり、かねてから新地方面にも小学校設立の強い要望があったことから、明治21年3月、新地町6番地古平警察署跡の建物（約52坪）を使用して新地小学校を創立した。

翌明治22年10月、ほぼその場所に新地小学校を新築したが、坪数などは不明である。

その上手には禅源寺が建っていて墓地や火葬場もあったが、明治15年に浜町の現在地に移転した際、墓地も移された。

■町内の小学校

鰊漁が盛んであり財政的にも豊かであった古平町内には、早くから町内に学校が創設された。学校の創設には建設費はもちろん、教員の給与など一切が郡の費用によってまかなわれ、

＜浜中小学校新地分校修業証書＞

特に校舎の建設などは町内の寄付によるところが大きかった。

明治13年8月、折から浜中学校を建設中であったが、沖村の平屋建ての民家を借り沖学校を創立した。

明治15年には沢江学校が創立され、明治20年には浜中小学校をはじめ町内の学校はすべて小学校と改称した。

明治22年には、群来村の学齢児童数も増え、新地小学校への通学には危険な崖道を通らなければならないことから、恵比須神社下に新地小学校群来分校が創立された。

明治24年になり、新地小学校・同群来分校・沖小学校・沢江小学校の4校は、それぞれ浜中小学校の分校となった。

そして明治36年、浜中尋常高等小学校が古平尋常高等小学校と改称になると、群来分校と沖分校はそれぞれ小学校として独立したが、明治38年、沢江分校は古平尋常高等小学校に統合された。

明治38年当時は、古平川には人がようやく通れる程度の仮橋しかなく、渡船によって人馬が往来していたが、この年、欄干つきの木造橋が完成した。これによって通行が便利になり、また、児童数も少ないこともあり、近距離にあった沢江分校が統合になったのである。

沢江分校は古平大橋を渡って間もなくの、現在、吉田ミツエさん宅付近の山側に建っていたとも言われるが、場所ははっきりしていない。学籍簿一冊と賞状一枚に学校名が残されているだけである。

古平郡内は近隣の郡に比べて就学率が高かったが、これは、比較的人家の密集している地域

＜古平郡の就学率・明治15年の調査＞

郡名	学齢人員		就学人員		不就学人員		就学率（%）
	男	女	男	女	男	女	
古平郡	一九八	一五八	一五六	三九	四二	一一九	五四・八

に学校が配置されていたからであろう。

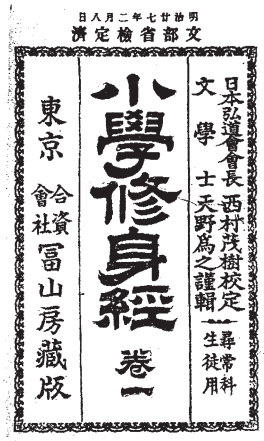
■簡易科から尋常科へ

明治19年4月、新しい小学校令が公布されたが、北海道では例外的な簡易科の課程で授業が行われていて、町内の小学校はいずれも修業年限が3年の簡易科であった。

また明治22年、浜中小学校では温習科1年を設置したが、簡易科を修業するとほとんどが家事手伝いや就職をし、最初の年は男子2名、女子は1名の入学しかなかった。

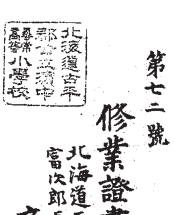
その後、明治28年の北海道庁令により、浜中小学校は尋常科4年、高等科3年の浜中尋常高等小学校と改称し、それによって児童数が増えたことから3教室を増築した。

＜修身の検定教科書・明治27年＞



この年、町内の4校の分校は分教場となり、明治25年から等級によって徴収していた授業料は廃止された。

＜浜中尋常高等小学校修業証書＞



■寄付金により校舎増築

明治30年になり、その後の就学児童数が増加し、また校舎を増築しなければならなくなった。しかし、公的な借金返済などで戸長役場の予算は前年の2倍にもなり、税金による収入もこれ以上は見込めないことから、町内有志からの寄付金によって増築する案を総代会に図り、これを募集することが決まった。

寄付金募集趣意書（要約）

浜中小学校ニツイテハ校舎ガ狭隘トナリ、コノママデハ未就学児童ヲ収容スルコトガデキズ、私共総代人ノ職責トシテ毎年増設ノ計画ヲシ、本年度ハ増設費トシテ二千百四十円ノ支出ヲ議決シタ。シカシ、今マデノ公的借金ノ返還ナドデ町村ノ負担額ハ前年ノ二倍ニモナリ、コレ以上ノ負担ハ生活ニ余裕ノナイ者ニハ耐エラレナイコトデアリ、止ムヲ得ズココニ有志ノ寄付金ヲ仰ギ、費用ノ幾分カデモ補填シヨウト考エ、公共ノ事業ニ賛成シ、各自応分ノ寄付ヲサレンコトヲ望ム

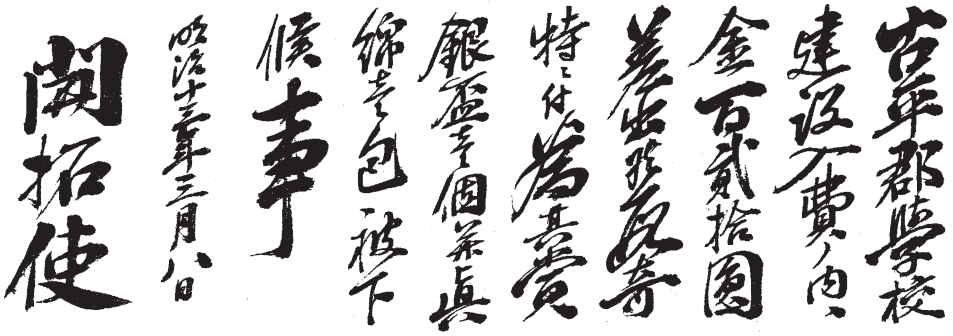
明治三十年五月

町村総代人

氏　名 ㊞

寄付金の総額は不明だが、建築費2、560余円で2教室を増築し、300円で石造りの御聖影奉安所を建設したというから、予定をはるかに超える寄付金が集まったと思われる。

＜明治13年・当時モダン校舎といわれた浜中学校建設に寄付＞



当時の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【65】

大正一一年

▼五月一一日

起床七時、今日から浜町郵便局が業務を開始する。局舎の体裁は本局よりもきれいでりっぱだ。開業式当日は日の丸の旗を立てたが、通る人が皆珍しがって見ている。浜町の人にとっては実に便利になった。快晴で熊さんは農園行き。私は役場へ行く。五月初めなので吹く風もまだ冷たい。夕方から帳簿整理をする。前浜の歩方七、八統は漁獲皆無ということで気の毒だ。中でも最も漁が無いいう小枝歩方に一〇〇余円の貸金があったが、今日、全額入金したた。気の毒なようだ。

▼五月一二日

起床七時、尋常科四年生以下の遠足があるというので、子供たちは握り飯やわらじなどの支度で大さわぎだ。五時頃起きて支度をする。幸い天気は良い。熊さんは人夫と農園で袋掛け。今は身欠、胴鰊などの出盛り時期なので、港内には積取り船が絶え間なく入港している。直江津、伏木、新潟や佐渡方面へ積み出している。これで町中にも大分金が廻るようになるだろう。漁場でも網を網倉に入れるところ、小屋ほごし、舟囲いなどで忙しい。

▼五月一三日

起床七時、昨日の雨で外仕事ができないので、熊さんは家の数の子こしらえをする。家の身欠を売ったら一〇〇円程になった。鰊場の仕事は骨が折れるが、また金にもなるものだ。雨で仕事も休みか、五、六軒から入金がある。佐渡から花の種やらいろいろな種物が送られて来た。

▼五月一四日

起床六時半、朝晩はまだ寒い。二、三軒からポツポツ入金がある。タラ釣りはまだ出ているようだ。聞けば余市辺り小網で鰊が獲れているとのこと。建網でも建て込んでいれば、五、六杯は毎日獲れていたろうとのことだ。あるいはそうかも知れぬ。餌があるので、タラ釣りもまだまだ出るとのことだ。タラ釣りは毎日のように大漁だ。切り揚げも大体終わったのか、店の方も用具の売れ行きは一段落したが、綿糸類など昨年よりも売り行きは悪かった。これも不漁のせいかも知れぬ。夕方、浜を散歩したがまだ寒い。手が冷たいくらいだ。

▼五月一五日

曇天、朝夕の寒さはこたつにでも入りたいようだ。漁夫もポツポツ切り揚げ、浜は一日一日と寂しくなる。農園ではイモまきが始まった。私は店番、売掛金が六軒から入り一五〇円程あった。自転車で銀行へ行って来たがハンドルを握る手が冷たい。今の時期にこんなに寒いことも珍しい。

▼五月一六日

毎日曇り空だ。農園では花苗の植え付けやゴボウの種まきをする。午後から子供らが農園へ行きイモを煮て食べたと、夕方喜んで帰って来た。店は閑散。売掛金三、四軒から入る。昨晩の値立てで胴鰊一束一円八〇銭に決まったとのこと。

▼五月一七日

今日は、この頃珍しく快晴の天気だ。家中で農園へ行き、残ったのは私一人だ。朝、浜へ出て見たがどこも漁夫は切り揚げで、浜はすっかり寂しくなった。本陣の浜へ小樽から大艀（おおばしけ）二隻が、ボートに引かれて来た。学校新築の用材で浜へ揚げている。これから建築にかかるのだが、秋にはりっぱな校舎が出来るだろう。島泊の木村から四〇〇円、小野寺から一、三〇〇円入金したが上客である。そのほか二、〇〇〇円余りの入金があったので銀行へ行き、月末が期日の約束手形の入金をした。この分だと、月末までにあと五〇〇〜六、〇〇〇円は入金するだろう。七時頃、農園の仕事が終わったと帰って来た。

▼五月一八日

起床六時半、天気快晴。学校で遠足があるというので、妻は速

くから起きて握り飯をこしらえている。農園では花苗の植え付けと薬剤をかけるという。店は閑散としているが、出稼ぎに行く人の行李（こうり）が売れるぐらいだ。刺網連中の入金が早く、特に沢江方面が早いのは、これも大漁のせいだろう。父もこの頃は気分が良いのか、わらじがけで農園へ行き桐苗など植えている。夕方、六時ころから霧雨が降り出す。この分だと明日も降りそうだ。新聞によれば、皇太子殿下には七月一〇日頃東京を出発され、北海道へ行幸なされる由、その時はまた大した人出で賑やかなことであろう。

▼五月一九日

昨夜来の雨、今日も一日休みなく降り、戸外の仕事も出来ないので、熊さんは掛け取りに出る。掛け取りと店の入金とで合計八〇〇円余りあった。今年は不漁で製品が少ないせいか身欠などの値段が良く、それで早くから売り出したので入金も早いようだ。銀行関係の分は今日で全部決済した。今日は雨で家に居て荷造りでもするのか、行李が五つも出た。

▼五月二〇日

今日も曇り空で、時々小雨が降る。呉服屋では、売り出しを始めたので賑やかだ。鰊製品が売れたので、町内の金回りも良くなったようだ。

▼五月二一日

起床六時、この頃は日が長くなったようだ。朝、学校の工事場へ行って見ると、馬車一四～五台で崩した土を運んでは地均しをしている。建築材料も運搬している。快晴の天気になったので、熊さんや出面の人たちも農園へ行く。店は閑散。売掛金三〇〇円余りが入金する。

▼五月二二日

今日は珍しい快晴。農園の方も忙しくなったので、出面三人と家から四人行ってまきつけをする。今までで五、〇〇〇程の入金があったが、今月中にあと五、〇〇〇～六、〇〇〇円程の入金があるだろう。銀行の帰り、入船町の浜坂から注文のあった、貝引き用のアマ撚り糸の見本を持参する。漁夫の帰った後なので、町はどこへ行っても寂しくなった。この後、カムチャッカ方面へ出稼ぎに行く人も多いとのこと。来月になると町中はもっと寂しくなることだろう。

▼五月二三日

天気快晴。皆農園へ行く。来たる七月一日、摂政宮（裕仁殿下）の北海道行幸が内定した由、各地で奉迎準備で忙しいとのこと。その時は、古平からもずいぶんと出かける人もいることだろう。

▼五月二四日

今日も珍しいような良い天気である。たまに入金があるぐらいで店は閑散。午後から久しぶりに農園へ行く。サクランボの花は七分どおり咲いている。八重桜はつぼみ、スモモは満開、リンゴはまだつぼみだが月末には咲くだろう。午後五時から新地古盛座で、町自治問題に関して町民大会あるというので行く。六時頃になってようやく始まる。鉄道問題、学校問題などについていろいろと批判が出る。一〇時頃に終わり帰る。

▼五月二五日

天気快晴。農園の仕事も一段落。出面二人は裏でまき割りをやる。学校の工事を見に行ったが多くの馬車が土を運び、人夫も大勢出ている。

▼五月二六日

天気は快晴だが南風が強く、砂塵を飛ばしている。温度計も六〇度（摂氏約一六度）をこす。今日も一、二〇〇円程の入金がある。不漁だった割りに例年より入金が早い。掛取帳ではあと一万数千円あるが、この分だと一万三千円ぐらいは入金するだろう。三千円ぐらいは明年に繰り越しになるのは致し方ない。支払い二万五千円としても、五千円程度は資本になるだろう。外に商品の手持ち分が一万円はある。このぐらいでいけば上首尾だ。

▼五月二七日

朝から風が激しく吹き、砂塵が飛ぶ。自転車で銀行まで行く。途中、風で吹き飛ばされそうになり、砂やごみで目も口も開けられない程だ。妻らが二時頃ワラビ採りに行き、夕方帰って来たが、ワラビ、ウド、タケノコなどかなり採って来た。この暑さで農園の八重桜も開き、リンゴのつぼみもふくらんだとのことだ。風が強いので、午後から火防巡回に出たが、夜になっても風が止まないので、火防組合から見回りが二組出た。（続く）

札幌通信＝第5信

釣りガキ時代

吉川義雄

小学校五、六年生頃からだろうか。時化も凪も関係なく、釣竿を背負って磯に出かけた。漁師の倅だから文句のないはずだが、これが大変。

「前浜か、築港か、崎か」と、行き先をトコトン聞かれ、

「危ないどごサいぐなッ」と、母の一喝が必ずとんでくる。

家の中より、丸山の廻りの海は知っていると自負しているから「一番ッ」とだけ答えて出かける。人の多く集まる一番岩周辺と言っておけば、何となく安心するだろうと、こちらの親心？　からだ。

どうころんでも、良くてアブラコ、大半はハゴトコどまりの釣果。釣ったモノを家の者は、ただの一度も「うまい」と言ってくれたことはないが、こちらもおほめの言葉を期待したことなぞない。

誰が名付けたのか、丸山岬には一番岩から二番岩、三番岩とあり、それから先はイヤでもズボンを脱がなければ行けない釣り場だから、たいていはその辺りで帰って来る。

山の裏側に出かけるのは学校の休みの日ぐらいで、多くても三人程度の仲間と行く。行程は青峯観音堂の近くから下る。十三曲りを気をつけながら磯辺まで行く。いつ誰がつくったみちなのか。広い道も無いわけではないが、それだと群来村を通り道のりが長くなる。

丸山の裏側にそれ程いい釣り場があるわけではないが、沖合いまで浅瀬があり、ガキ共が通称ダンゴ岩と言う周辺から、海中に幾筋もの亀裂が走っていて、うまくいけば意外な大物もひそんでいるのだ。そこまで行くからには皆パンツ一枚で、足場によっては、海から陸に向かって釣りをしている形になる。腰にはフゴ(竹籠)をつけ、釣った魚が中でバタつくのがたまらない。

釣り人は誰でも、自分の穴場は易々と人に語らないことぐらいはガキの頃から身につけた。不思議なくらい同じ場所で、望む大物を釣りあげたものだ。

十三曲りに行った帰りだけは、腰まで海につかりながら丸山岬を廻って来る。ダンゴの浅瀬が沖で終わる辺りに見事なヒル貝が付いていて、母が出際に「ライスカレー」と言った言葉を思い出し、籠の中はヒル貝でアブラコが押し殺されている。

築港が出来たばかりの外海ではナガラ(ソイ)がよく釣れた。この魚は夜釣りでしかも餌に注文があるから、前浜でエビをすくったり、汐だまりでゴダッペをとったり、夜まで生かしておくことになるから大変だった。

そのかわり、竿が折れるかと思う程の引きの強さと、塩焼きぐらいは慣れッこの家族の誰かが「うまいッ」と、ひとこと言った言葉が励みとなって、雨の夜でもカッパを着て夜釣りに出かけるハメになった。

「どうだ。釣れたかァ」と、岬でも、水なしの浜でも、ダンゴの辺りでもよく見かけ、言葉をかける大人が居た。釣り好きが釣り人に好意を寄せるのは、子供たちも同じこと。その人は「村井さん」というんだと、ガキ仲間は当然のように好感を持っていた。

「どんなのを釣ったのかなァ」と、フゴの中身を知りたがったが、ついぞそこまで声をかける者はいなかった。

入れ食いで、邪魔者扱いのガヤも大分姿を消した頃、「札幌から来てよう、さっぱり釣れねってゴモゴモ言うから、よしッ、さぁ釣れッて、ローソク岩のそばまで行ってガヤをシコタマ釣らせだら、やァやァ泣いで喜んだべや」

古平で弟の吉采丸と会ったときの弁。優雅な磯釣り時代に、竹竿をかついで丸山の周りを渡り歩いたことの何と幸福だったこと。海は今も青いだろうか。

古平いろはうた

め　名水は泥の木川の滝となる

□恵みの古平川

昔、蝦夷地と言われた頃、現在の古平を通った人が「大きな川があり、周辺の平地は農耕に適している」と、記録に残している。

古平川は郡境の源流から全長二〇数キメートルあり、泥の木川はその支流で長さ約八キメートル、平地に広がる水田を潤してきた。

□泥の木川と観音滝霊場

ある時、禅源寺住職の秋田岳轉和尚が、土地の人の話から泥の木川に懸かる滝を訪ねたが、山の静寂と風光明媚な景観を嘆賞し、大正一三年秋、観音像を祀って一帯を霊場としたことから、多くの参詣人が訪れるようになった。

その後、川沿いに三〇体余りの観音像を安置し、景勝の地としても広く知られるようになり、一〇月一七日の例祭には参詣の人で大いに賑った。

また、両古美山や泥の木山を源とする泥の木川の水は清く澄んで、水量も豊かであることから、岳轉和尚は自ら歌を詠んで歌碑を建てた。

岸打つ波はみなかみの
観音滝へひびくなるらん

「…滝の水は陸に注ぎては豊作となり、大海に浸入しては豊漁満足となり、永久平和の幸福を守る意なり」と、この歌の作意の由来を述べている。

□上水道の建設

古平では長い間、飲料水や生活用水などは共同の井戸やポンプで、また一部の地域では川水を利用してきた。

しかし、常に衛生的な面で不安がつきまとい、また一般家庭での生活様式も変化し、水産加工業などが盛んになるにつれて水の需要が年々増える傾向があり、西部地区からは特に上水道設置の要望が強かった。

これには、昭和二四年五月の西部方面大火の苦い思い出が重なり、防火用水を確保することもその願いであった。

そこで昭和三六年三月、町議会に簡易水道調査特別委員会が設置され、七月、道庁と余市保健所から担当係官を招いて具体的な協議に入った。

当初の計画は取りあえず飲料水に不足している西部地区を給水対象にしていたが、協議の結果、全町を対象にした方が適当であるとの結論から、水源地としては泥の木川が有力視され、早速、現地調査が行われた。これにより立案され、設計や見積もりがなされることになった。

□清流を家庭へ

昭和三七年一二月水道設置の許可が下り、三八年八月着工、二年後の四〇年九月に竣工し、西部方面一円と港町、沢江村、浜町、栄、鴨居木、泥の木に給水が開始された。

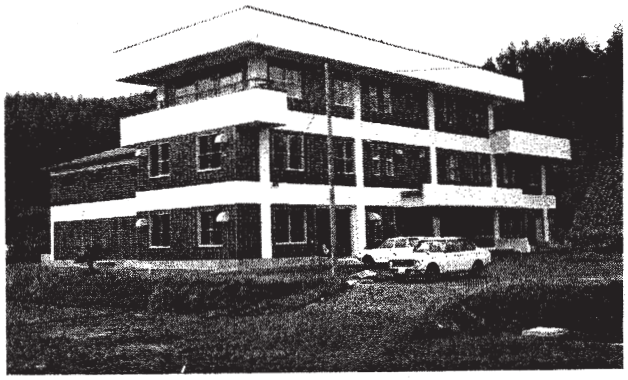
区域内の人口は九、〇四〇人で、給水人口が六、一一〇人、普及率は約八五%であった。

計画給水量一日八六二㌧メートルに対して、給水能力は一日約一、三〇〇㌧メートルであった。

沖町は、昭和四八年に緩速ろ過方式の簡易水道が完成した。

その後も上質の水道水を確保するため、昭和五一年、現在の浄水場と汚泥処理施設を建設し、これにより第一次の上水道工事計画が完成した。

住民の夢とも思えた快適な上水道が完備し、それを支えているのが泥の木川の名水である。



＜浄水場・昭和51年10月完成＞

幼な子と紙風船

大澤文子

いつか居間の暦も卯月となり鈍色の海面も春色に変わる頃。

「しばらくでしたァー、また来ましたヨー」

張りのある、そして親しみのある声が戸口を叩く。

「わァ！　おじちゃんだァー」

絵本を投げ捨て、いつも真っ先に飛出るのはわが家の幼な子たち。富山県からはるばる商売に見える才田屋さんのご主人の声だ。

浜町の吉井旅館に何日か泊まり、得意先を一軒一軒廻り商売をしてゆく。先年注文の品を届け、また次回の薬の注文を受けてゆかれるのだ。中ぐらいの竹行李三個程に種々の薬品をぎっしり詰め込み、紺色の木綿風呂敷に包んで背負って来られる。いくら慣れておられるとは言っても重労働ではないか・・・と。やや痩せ気味のご主人の肩を垣間見ることもあった。

また、私の父は教職についていたので幼い頃より転勤が多く、都会生活のためか個別訪問の薬屋さんには一度も出会った記憶もない。古平町の住人になってから親しく出会うことになった才田屋さんだった。

必要な薬品があっても店先へ出向くこともなく、注文さえしておけば配達してもらえる便利さ。ありがたいこととしみじみ思ったものだった。

家人との挨拶がすむと、才田屋さんはやっと三段重ねの竹行李をほどき、前回注文した品々を取り出しわが家の薬箱の残品と入れ替えをする。次回の注文を丹念にメモしすべて終了すると、才田屋さんの声が幼な子たちに向けられる。

「お待ちどうさま！さあさあ」

にこやかな才田屋さんの声に、

「わァ！　待ってたヨー」

とばかり、おじさんの手元ににじり寄ってゆく幼な子たち。

美しく薬品の絵模様を描いた色とりどりの紙風船、それにゴム風船などなど。子供たちの目は喜びに輝き歓声をあげるのが常だった。

その後は、何日か遊び相手がなくても風船に夢中になってくれるので助かったものだった。

その頃からか私はなんとなく体に変調をきたし、常に「六神丸」を愛用していた。桐の小箱に入っている小粒の六神丸、仁丹よりまだ小粒なので手のひらを丸めて三粒のせる。どう言うのかいつも深夜に服用していたがすうっと安堵感を覚えさせてくれる。何となくわが身を快く癒やしてくれる唯一の薬品だった。

ひとまず薬品の受け渡しもすみ、子供たちのご機嫌とりもおわると、才田屋さんはよく、よもやま話を楽しくおかしく聞かせてくれる。

その後何年か経ち、ご主人は今度函館方面への商売に行かれるという。

「今後は息子が担当するのでよろしく」とのこと。若い息子さんは大風呂敷を背負うことなくオートバイだった。ご主人に似た笑顔で「毎度！」と声掛かりも賑やかで、相変わらず三段重ねの竹行李を荷台からはずすと、子供たちへの人気とりもさすが。都会の香りも多分にふりまいてゆく若主人。テレビのこと、ボーリング場のことなど話題は尽きない。また都会の種々の話題をふりまいて行く才田屋さんを、子供と共に「待つ！」という楽しみをひとつ持ったことも否めなかったのではなかろうか。それから何年か経ち、夫の都合で私共は札幌のひととなった。

「くれぐれも気をつけてね」

と、才田屋さんの若主人が餞別といって手渡してくれた桐の小箱。

「ありがとう！」、いまは減ることもなく薬箱に収まっている「六神丸」である。

戦中戦後

泣き笑いの樺太漁場体験記

吉野慶一郎

今までどおりの漁業　ソ連軍が進駐して暫くは軍政でしたが、その後、民政に代わってからようやく普通の生活に戻り、ソ連の民間人とも親しくつき合うようになりました。

ソ連人も日本人も、互いに相手国の日常用語辞典などを持って言葉を覚えました。相手の国の言葉もまず単語を並べ、身ぶり手ぶりの会話はユーモラスなものでした。

「今晩、映画(キノー)を見に行きませんか」

「昨日、(映画＝キノー)見ました」

ロシヤ語で映画のことをキノーと言うので、日本語のきのう(昨日)と感違えして大笑いしたこともありました。

言葉の足りないところはゼスチャーで補い、書くことはなかなか出来ませんでしたが、会話はしぜんと慣れて楽しいものでした。子供たちの方はすぐに慣れたしまったようでした。

おばさん？が歩哨に立つ　町に一軒あった酒造会社も接収されてしまい、酒蔵には歩哨が立っていましたが、酒の好きな人にとっては我慢ができないのか、なかには腕時計を差し出して酒と交換する人もいて、腕時計一個で酒一斗(一八リットル)だったと後で聞きました。

そして二度目には、古い時計を一時的に動くようにして酒と交換し、これに味をしめて三度目もインチキ時計で酒樽と交換し、家に持って帰って樽を開けたところ、中は水だったという笑い話までありました。

一方、漁船の着く岸壁には周りに塀をめぐらし、ここでは民間の、しかも女性が軍服を着て、形ばかりだが銃を提げて歩哨に立っていました。これは自由に魚を持ち出させないためでしたが、その女性の歩哨に魚を上げると持ち出しも黙認でした。

歩哨に立っている女性を見ると体格がよく、にこやかな顔をしていて、とても歩哨などには向かないような、ソ連の典型的なおばさんでした。ソ連では、男のする仕事は当然のこととして女もやっていました。歩哨は漁船の出入りする時間だけ監視していました。

ソ連人にも人気のちくわ生産　何はともあれ、われわれも生活のためには働かなければなりませんでしたが、ソ連側にしても生産を上げる必要性がありました。

一〇月頃からカレイ・サメの手繰り漁が始まり、野田水産工場では冷凍品を島内の各地に送ったほか、スケソ・ホッケなどでちくわの製造などもしていました。戦時中は軍隊に納めるマスのくん製、イカの塩辛、昆布巻き、タラの粕漬けや味噌漬けなど、いろんな水産加工品を製造していた経験もあって、それらの製品も作り水産工場は多忙でした。

工場長をしていたのは、後に古平に引き揚げて来て、役場に勤務されていた野村丞次郎さんでしたが、大変な苦労をされたようでした。

ロシヤ人は片手にパン、片手には生の塩鮭を持って食べますが、ちくわも大好物でした。私たちも食糧事情が悪かったので、ちくわは働く人たちのおやつとして、副食としていつも沢山買っていました。

職場を求め生産増強　ソ連では「日本人は今まで通りの商売をしなさい」とは言うものの、現地で原料や商品を仕入れことは出来ないし、また、日本とは行き来が出来なくなってしまったので、現地の材料を調達するしかなく、商売も限られたものになってしまいます。それで勤め先の無くなった人たちはソ連の国営の事業所で働いたり、日本人の経営している漁場や水産加工場、王子製紙などで働いていました。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

―6―

橘　義春

―転　属―　（続く）

これは大変なことになりそうだ。俺は北海道生まれだが、寒さにはめっぽう弱い男だ。

部隊が解散になるので、糧秣倉庫を空にしなくてはいけないらしく、それからは連日、朝・昼・晩と飯がいつもの三倍程も班内に配られる。腹ペコの私たち初年兵は、アルミの食器に山盛りにして二、三杯は食べたものである。これで情けない飢餓状態からやっと脱することができた。

六月三十日、いよいよ部隊解散の日となった。前の日に、親戚の矢代敏夫さんにお別れの挨拶に行って来た。

「まだはっきりしないが、俺は中国大陸へ行くらしい」と、言っていたがその通りになり、終戦後、中国大陸で病死してしまった。

今でも惜しい男を亡くしたと思っている。いよいよ皆と別れの日が来た。盛岡駅で楢岡上等兵がホームから私に、

「俺たちは大陸へ行くらしい。橘も元気でがんばってくれ。どこへ行っても体だけは気をつけてナ。世話になった」

「上等兵殿もお元気で……ありがとうございました」

これだけ言うと、何か熱いものがぐっとこみ上げてきた。二か月間の短い戦友だったが別れるということは辛いものだ。

列車の発車時間がきた楢岡上等兵は私たち初年兵の一人一人に、目を真っ赤にして、「元気でがんばれよ」と、声をかけ励まし、私たちの乗った汽車が見えなくなるまでホームで大きく手を振り、別れを惜しんでくれた。

北へ行く者、南へ行く者、それぞれが万感の思いを胸にして盛岡駅を出発して行った。私たちは一路、弘前の連隊へ――。

竹田班長と白ブタは私たちに同行して来た。弘前の連隊で一泊し、翌日、秋田の連隊へ向かったが連隊で伝染病が発生したため、中に入れず秋田市の公園前に或る旅館に泊まることになった。竹田班長は別の旅館だったが白ブタはいっしょだった。ここで三泊ぐらいしたような気がする。

そのとき竹田班長から電話がきて、誰か一人連れて旅館へ来てくれとのこと。喜んで隣町だった同年兵の白川といっしょに班長の旅館を訪ねた。

「橘、どうだ。旅館に泊まった気持ちは？」

「いいですね。何だか地方人に戻ったような気分です」

「そうか。それはよかった。明日、北海道へ行く者と、ここに残る者が別れることになる」

「班長殿はどちらへ行かれますか」

「俺にもよく分からないが、秋田の連隊からどこかへ行くらしい。すまないが、これは俺の私物だが郵便局から俺の家へ送ってもらいたい」

二人で班長の荷物を郵便局から送り、ついでにこんなことはめったにないので、役得とばかりに秋田の街をぶらぶら見物し、公園内も一回りしてから旅館に引き揚げた。二か月ぶりに解放された気分になり、自由というものを満喫した。これもきっと班長が配慮してくれたものと思う。

何だかこの三日間は皆も解放されたような気分で、夜、布団に入ってからもすぐ眠れないでガヤガヤ話をしていたら、

「何時だと思っているんだ、さっさと寝ろ！」

と一喝されたが、奴とはどうせ今晩限りでサイナラだと思っているので、誰もまともに言うことをきかない。そのうちにまたガヤガヤと始まったら、白ブタが、

「何度言ったら分かるんだ。もう寝ろ！」

（続く）

俳句鑑賞

俳句のモデル

お楽しみコーナー

俳誌悠主宰　水見壽男

いよいよ新学期が始まりました。私の第二の故郷流山市は中学生が十五万人余の千葉県の中核都市ですが、小林一茶曽遊の地として知られています。流山市と一茶のふるさと信濃町とは姉妹都市の間柄で、両市町とも大変俳句の町であります。私は乞われて流山市俳句協会の会長してをり、また広報ながれやま俳壇の選者もしております。

四月一日号の広報は、何故か入選五句に対して百五十句余の応募があり、選句に頭を痛めます。

加えて流山市ゆうゆう大学（六十歳以上が対象）と入学式を迎え授業が始まります。二年間の大学生活ですが、一年次はまず俳句の基本を勉強し、写生をみっちり叩き込みます。授業は楽しく厳しく優しく、そして和を以て貴しをモットーにしています。そんな授業の中の名句鑑賞の一句として、また俳句の添削例として、高浜年尾先生の、

わが橇の馬が大きく街かくす　年尾

の句を挙げます。この句の初出の原句は、

わが橇の馬が大きく道かくす

でした。場所は札幌競馬場から坂道をよっていまの北海道神宮（元札幌神社）へ友人（小樽高商同期）二人と馬橇で参詣の道程で作句されました。年尾の父虚子はこの原句の道を街と添削して、小景の句を大景の句に仕上げました。

道かくすと、街かくすでは自ずと俳句の背景の舞台装置が変わってきます。一字の添削を得たことにより句柄は大きな翼を得ました。先生の代表句、名句として鑑賞されています。添削はあれこれ直すのではなく、一字で見事に花開くという一例です。

蜑の子が海胆をとりくれ磯遊び　年尾

モデルは何あろう私奴であります。

年尾先生ご夫妻が父悠々子の請ひで古平を曽遊の折、私を蜑の子に見立てて作句されました。モッコ岩あたりの浜鍋を囲んでの一句会だったそうです。この句は俳句の存間、即ち挨拶という一面を伝えて清々しい一句です。年尾句集にも掲載され、後日、この句は年尾先生のご揮毫をいただき、四月を迎えるとわが家の床の間を飾ります。私の少年期を綴る思いでの一句であります。

編集雑記

▽春先の寒暖に一喜一憂しながら「春はどこへ迷いこんだか」と、やきもきしていましたが、古平にもサクラのシーズンの到来が間近です。

▽戦時中から戦後にかけて、チョペタンの沢で炭焼き、群来村で鰊釜を使って製塩をしたという記録があります。このことで何かご存知の方は居られませんか。

▽先月から【郷土の民俗資料】として、古くから町内で使われていた生活用品や産業にかかわる道具類を展示することにしました。文化会館ロビーと追って元気プラザにも展示の予定です。解説パンフレットも作ってありますので、お出での節にでもご覧ください。

▽毎年のことですが、5月10日は心の戒めとしての古平町大火記念日です。例年のように消防演習が行われますが、今回、古平支署で大火の記録写真集を発行し出席者に配布しますが、余分に作りましたのでご希望の方には差し上げます。

▽なぜか、先月号が早々と品切れになりました。海洋センターにも届いていなかったということで、ご愛読の方には申し訳ありませんでした。

短歌

古平町岬短歌会

千年前東風吹かばと詠みし菅公の梅咲きたるをテレビにて見る
わが町への方向を見定めにつつ仁木の高台に広く見渡す
池田テル

白髪を七三に撫で表付きの草履はきし人はいつしか退院されぬ
日当りの郵便受の下辺には黄のサフラン咲かず春の雪降る
奥山きよみ

冬囲ひを解けばどうだん吹き初めて弾けむばかりに小枝を伸ばす
農協の人ごみの中知らぬ人に教はり教へ野菜種選る
鈴木時子

俳句

古平ホトトギス会

裏山の囀りきくも遠からず　斉藤波留
超ミニの娘の膝小僧雪解風　山口悦子
縫ひぐるみ一人遊べる寒の夜　越野敏雄
春草の萌ひたつ庭の車椅子焚く　大和田絵伊
雪解けの川面に春の光りさし日増しにすすむ流れの早さ
前浜の指に触れたる水ぬるみ昼の海辺に心地よき風
田中香苗

さはさはと水音清しチョペタン川春の海へと蛇行してゆく
背で泣かれ共に泣きたる日もありき孫抱く妹にふと思ひ出す
丹後初江

待春や旅の誘ひの長電話　よしざきり
水鳥の波の窪みに遊びゐる　越野清治
子の部屋にノックしている新学期　仲谷比呂古
北国はまだ長靴よ花便り　室屋弘子
幸平吟

沖風の和みて来たる春の昏るゝ
花吹雪まとひつ駅弁ひろげたる
花の友より集りて車座に
花こぶし不倒だるまの墨絵かな
早々と漁切り上げて花の下

短歌作者の訂正　二首とも作者は池田テルさんです。
雪まつり観むと発ちトンネル事故にあひ還らぬきみらよ今日は命日
春来れば芽吹く猫柳抱き遠く来て夜更け語りしきみを思ふも
(正)池田テル　(誤)竹内コト

古平町史年表

13

明治３７年（１９０４）　～続き

▲古平尋常高等小学校の増築校舎が竣工して、２部授業が解消される。

▲日露戦争（明治37~38年）を記念して、古平尋常高等小学校の基本財産とすることを目的に、群来村萱野の町有地約３町歩にカラマツを植林する。

明治３８年（１９０５）

▲沢江分教場が本校に統合される。１１月に初めて余市までの修学旅行が行われる。

▲仮橋に代わって欄干付きの古平橋が竣工する。長さ約１００メートル、幅２．７メートル、この橋が出来るまでは渡し舟で、渡船料は大人２銭・子供１銭、馬車４銭であった。

明治３９年（１９０６）

▲踏み分け道の古平～余市間の山道を、地方費道として改修する。

▲浜町新開町から出火し３４戸を焼失する。原因不明。

▲余市銀行が小樽銀行と合併、小樽銀行は後に北海道銀行と改称。

明治４０年（１９０７）

▲北海道町村制の実施により、古平町が２級町村から１級町村となり、町会議員定数も１６人に増える。

▲余市境界までの仮県道を余市・古平・美国・入舸・余別の５か町村が費用を分担して改修する。

▲真言宗の僧侶門屋真明が、成田山教会所を創建し、昭和の始めに新道脇の高台に移築したが、戦後、廃寺となる。

明治４１年（１９０８）

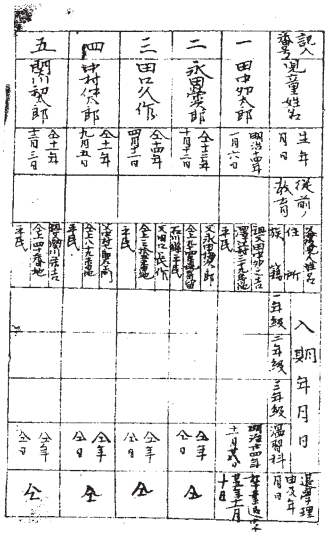
▲沢江村から出火し５戸を焼失する。外に保津船（ほっせん）４隻が焼失。

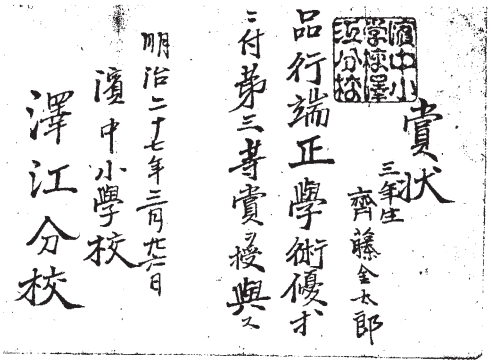
▲丸山町でも４戸を焼失。幼児１人が焼死する。

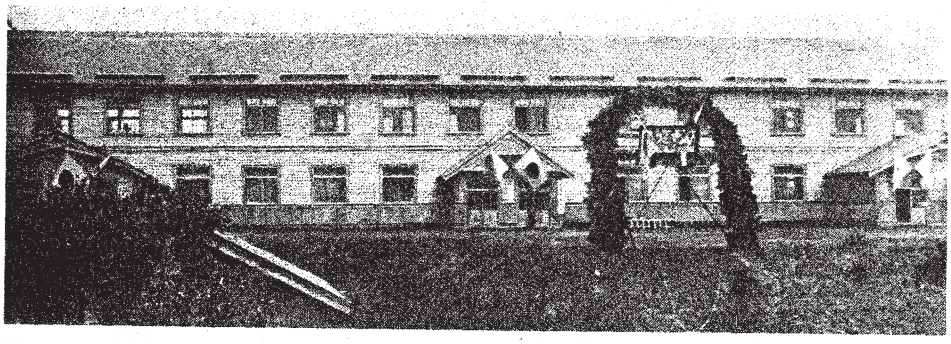
明治４２年（１９０９）

▲古平郵便局が火災で焼失する。港町に局舎を新築して移転し、電話事務も行う。

▲古平尋常高等小学校新校舎が落成する。







➡場所は現在の古平町文化会館敷地

⬆沢江分校の学籍簿と賞状